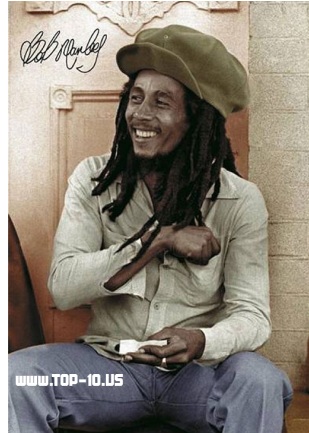


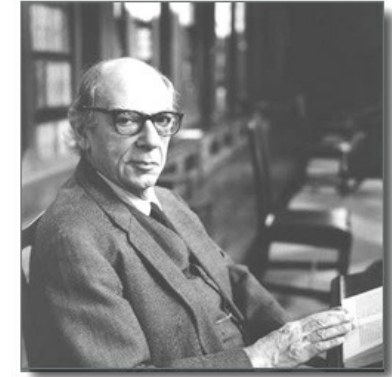
自由とは？

- 「自由」 Freedom、Liberty はみんな大好き。自由がステキなものなのは皆認める。
- “Better to die fighting for freedom than to be a prisoner all the days of your life.” --- Bob Marley
- しかしなにが自由なのかについては意見が分かれる。



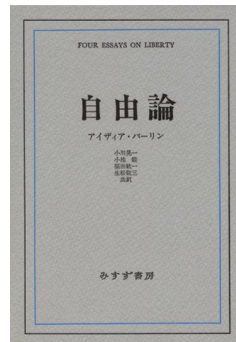
二つの自由

- アイザイア・バーリン (1909-1997) の「二つの自由の概念」
- 消極的自由と積極的自由。



消極的自由／積極的自由

- 消極的自由
 - － 「強制されていない」「束縛されていない」。
 - － 常識的な意味。
 - － 社会的自由。
- 積極的自由
 - － 自律、自己コントロール。
 - － 一部の哲学者・思想家・政治家たちなど難しいことを言う人々が好む。
 - － プラトン、ルソー、ヘーゲル、マルクス、etc.



積極的自由

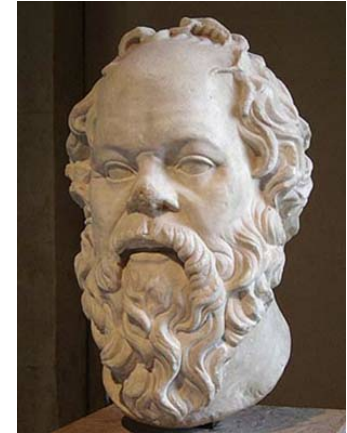
- 一般人の考え方では、自由は強制・束縛されずに自分が望むように行為すること
- しかし、「自分が望むこと」をするということとは、自分の欲望にしたがうこと
- 欲望は自分の思い通りにはならない。欲望のままに生きるのは欲望の奴隷になること
- 自分が望むことをするのではなく、しなければならないことをするのが自由

積極的自由

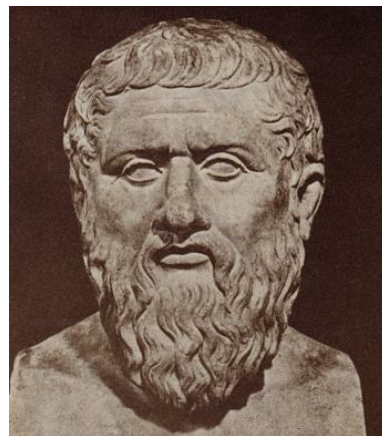
- 喫煙者、アルコール依存症、ヤク中etc.たちは自分がタバコやアルコールをやめるべきであることを知っているがやめられない。タバコやアルコールの奴隷
- 欲望ではなく、理性にしたがって、なすべきこと、正しいことをすることが自由

「積極的自由」と政治

- ソクラテス「正しいことをしっかり知っている人はそれをするはず、正しいことをしないひとは正しいことをよく理解していないはず」

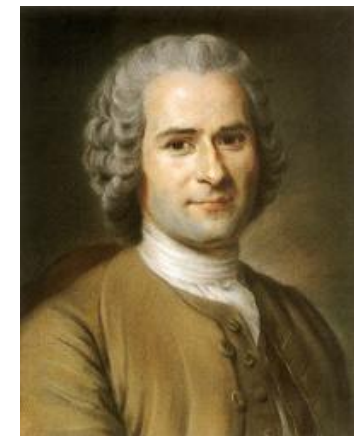


- プラトン「知識や知恵を獲得できるのは少数の人だけ。大衆は無知。したがって、賢者が大衆に正しい道を教えなければならない」
- → 「哲人王」という発想



ルソー

- ジャン=ジャック・ルソー (1712-1778)
- 『人間不平等起源論』、『社会契約論』、『エミール』など



『社会契約論』

- 「人間は生まれながらにして自由であるが、しかしいたるところで鉄鎖につながれている。自分が他人の主人であると思っているような者も、実はその人々以上に奴隷なのだ。」
- 「各人がすべての人と結びつきながら、しかも自分自身にしか服従せず、以前と同様に自由のままである」ことはどうすれば可能か？
- → 自治（自律 autonomy = auto + nomos）することが自由。自分たちを自分たちで支配すればよい。

12

一般意志

- 一般意志 *volonté generale*。
- 政治的決定は一個の共同体として全体の利益を求める「一般意志」によらねばならない。
- 「市民が十分な情報において討議するとき、市民が相互的になんの打ち合わせもなければ、わずかの差が多く集まって一般意志が生じ、結果はつねに善きものであろう。」

13

- 「人民の一般意志は絶対的であって、誤ることもなければ、例外も認めない。」
- → フランス革命後、ロベスピエールの独裁と恐怖政治の根拠に。



カント

- インマニュエル・カント (1724-1804)
- 時間厳守の真面目な人。散歩も時間通り。しかしルソーを読んだときだけは時間を守れなかった



「啓蒙とはなにか」

啓蒙とは、人間がみずから課した子ども状態から抜け出ることである。子ども状態とは、他人の指導なしには自分の悟性（理解力）を用いる能力がないことである。このような子ども状態の原因が悟性の欠如にではなく、他人の指導がなくとも自分の悟性を用いる決意と勇気の欠如にあるなら、子ども状態の責任は本人にある。

- 「Sapere Aude! あえて知ろうとせよ！／あえて賢くあれ！」 「自分自身の悟性（あたま）を使う勇気を持て！」こそ啓蒙のモットーである。.....未成年でいることは、たしかに気楽である。わたしのかわりの悟性をもつ本、わたしのかわりの良心をもつ牧師、わたしにかわって食事を気づかってくれる医者などがあれば、わたしはあえて自分の力を使う必要などない。支払うお金さえわたしにあれば、自分で考える必要などない。誰か他のひとがわたしのかわりに厄介なことを考えてくれるだろう。

親切にも人々の後見を買って出ている保護者たちが、大多数の人々（これには女性全部が含まれる）が、成熟することを、難しいとだけでなく危険でもあると思いこむように仕組んでいるのである。まず自分の家畜たちを愚鈍にてなづけ、次にそうして従順になった家畜たちが、つなぎとめられている補助車なしには一歩も歩き出せないようにした上で、万が一、彼らが一人で歩きだそうとなどすれば、この保護者たちは危険だぞと怯えさせる。

- ところがこんな危険というものはたいしたものではない。なんどか転んでしまえば、けっきょくはちゃんと歩き方を学ぶことができるのだから。しかしこういった戒めでさえ、ひとびとを気おくれさせ、それ以上のことを試みなくさせるに十分なのである。

カント

- 道徳的に価値があるのは、当人が「自由に」行なったことだけ
- 商人が自分の利益のために顧客に対して正直に商売することに道徳的な価値はない
- 愛情から友人が困っている時に助けるのも、愛情という感情や欲求からであれば道徳的価値はない

できるだけ他人に親切にすることは義務である。そして、世の中には同情心に富んだ人々が多くいて、そういう人々は虚栄心や利己心などという他の動機なしに、喜びを周囲の人々に行き渡らせることに内的な楽しみを感じ、自分のおかげで他人が満足を与えることをこの上なく喜ぶことができる。

たとえば、商人が不慣れな買い手に高い値段をふくかけないとすれば、それは確かに義務に合致した行為である。そして売買が盛んにおこなわれる場合には、抜け目ない商人でもそういうことはせず、決まった一般的な価格をすべての人に示し、その商人ところでは子供でも他の人々と同じく立派に買い物ができるようにするのである。この場合商人は正直にふるまっているわけである。しかし彼は義務である正直の原則にもとづいてそうしたのではなく……彼の利益がそのことを要求したのである。

けれども、私は言う。この場合、そのような行為はいかにも義務に合致した愛すべき行為ではあるが、しかし真の道徳的価値はもたず、他のまざまな心の傾向と同様である、と。たとえば名誉を求める傾向が、実際に公衆のためになりかつ義務にかない、したがって名誉に値するようなことがらとうまく一致する場合、賞賛と励ましを受ける値打ちはあるが、尊重を受ける値打ちはないのと同様である。

そこで、仮に上の博愛家の心が、彼自身の悲しみによって曇らされ、その悲しみは他人の運命に対するあらゆる同情を消してしまったとしよう。彼は、困っている人々に親切にする能力は依然としてもってはいるが、自分自身の困窮で心が一杯であるため、他人の困窮は彼の心を動かさないとしよう。

- さらにまた、ある人が生まれつき同情心乏しく、気質の上では他人の苦しみに対して冷たく無関心であるとしよう。……そういう人は、やさしい気質の人のもつ価値よりかはるかに高い価値をみずからに与える可能性を、やはりみずからの内に見いださないであろうか。確かにそういう可能性がある。そういう人が傾向性に基づかず、義務に基づいて他人に親切を尽くすという場合、まさにそこに、性格の価値というものがはじめて生じるのである。（カント『道徳の形而上学の基礎づけ』）

- このように、もはやいかなる心の傾向も彼を促さなくなった場合にも、やはり彼はそのようなひどい無感覚の状態からみずから抜け出し、いかなる傾向もなしにただ義務のみにもとづいて親切をするとした場合、その行為はじめて真実な道徳的な価値をもつのである。

カント

- 「自由に」行為するということは、自分の欲求や感情を離れ、理性に従い、理性によって発見した自分のなすべきこと(義務)を行うということ。



自由

「ある人が、自分の色情の傾向性について、もしお気に召す相手とそれを手に入れるチャンスとがおとずれるとしたら、この傾向性に逆らうことなどとてもできないだろうとうそぶいているとする。それでも、もし彼がそのチャンスに恵まれる家の前に絞首台が建てられていて、色情を思うままにした後でただちにそこに吊されるとしたら、彼はその場合でも自分の傾向性を抑えることはないだろうか。彼がなんと答えるか、長く考えてみる必要はないだろう。」

しかし、彼にこう尋ねてみるとしよう。もし彼の君主が、同じように即刻の死刑という威嚇の下に、ある誠実な人物に対する偽証を彼に要求し、その偽りの供述を理由に、その人物をなきものにしようとしていたいと思っているとしたら、はたして彼は、どれほど自分の命をいとおしむ気持ちが大きくても、その気持ちをよく克服することが可能であると思うだろうか。」

「彼がそれをするかしないか、おそらく彼もあえて確言はできないことだろう。それでも、それが可能であることは、彼もためらうことなく認めるに違いない。彼は、こうして、そのことをなすべきであると彼が意識するがゆえに、それをみなすことがらができる、と判断するのであり、もし道徳法則がなければ知られないままにとどまったであろう自由を、みずからのうちに認識するに至るのである。（カント『実践理性批判』）

- 単に自分の欲望を満たそうとすること、自分の欲望に忠実であることは実は欲望への隷属。自由ではない
- 自由は理性で判断してすべきことをすること。難しいが、とにかく可能ではあるだろうという主張

19～20世紀

- ヘーゲル→理想主義
- 「真の自我」「本当の私」は、個人的な自我よりもっと大きなもの、社会的「全体」(種族、民族、教会、国家、世界精神)の一部
- 個人的な欲望etcに動かされている低劣な「自我」を「真の自我」と一体化させるためにある種の強制を行うこともやむをえない
- 「全体」のための献身こそが気高い自由

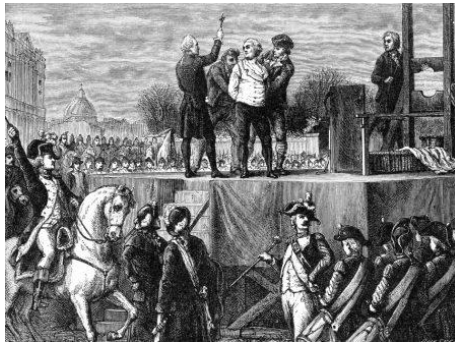


「自由」の強制？

- 正しいこと、「なすべきこと」をなすのが自由であるならば、なすべきことを強制することはその人を自由にすることになる？
- 「自由」の強制、道徳の強制、幸福の強制
- →ハクスリー『すばらしい新世界』。オーウェル『1984』などのディストピア小説

権威主義・全体主義

- フランス革命時のジャコバン党。
- ナチズム、ファシズム。
- スターリニズム。



ヒトラーさんとスターリンさん



ホロコーストで600万？



「大粛清」で700万？

Arbeit Macht Frei = 働けば自由になる



毛沢東さんとポル・ポトさん



文化大革命と飢餓で4000万?



800万人中200~300万人

パターナリズム

- パターナリズム Paternalism。Pater = father。お父さん主義、温情主義。
- 当人の利益のために、当人の意思や欲望に反してなにかを強制する。
 - 歯磨き、予防注射
 - 勉強、体操
 - ピアノのおけいこ、習字
 - 健康保険、ヘルメット、シートベルト、薬物.....

J. S. ミルの『自由論』(1859)

- パターナリズムに強く反対
- 「危害原則」 Harm Principleを提唱
- 言論の自由をほぼ絶対的に支持
- 生活の自由、個性の自由を強く支持
- → 現代のリベラリズム（自由主義）の原型をつくる。（経済的な自由主義とは別のものなので注意）



ミルの危害原則（危害原理）

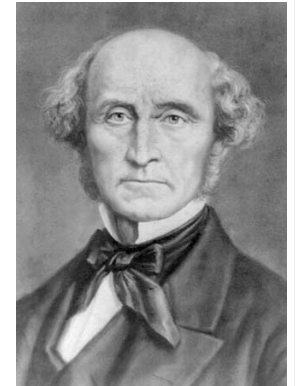
- 政府や社会が人(成人)の行動に正当に干渉できるのは、その行動が他人に危害を加えるときのみ。
- 単なる個人的道徳や、「当人の(本当の)利益」のために当人の意に反して強制することは許されない。

幸福に生きるための 「生活の実験」の必要性

- 当人の幸福に一番関心があるのは、たいていの場合、当人自身。当人について一番よく知っているのも、たいていの場合、当人自身
- → 当人に世話させるのが一番
- たしかに伝統・慣習は重要。伝統は長年にわたる多数の人々の知恵
- しかし慣習は多数派のためにできているので、それが自分に本当に合っているかどうかはわからない。自分でよさそうだと思う生活を試してみる必要がある

能力を伸ばす

- J. S. ミル (1806 -1873)
- 幸福に生きるためには、人間らしい能力を伸ばすことが必要
- そのためには、自由と自己決定が必要



ミル『自由論』から

経験（慣習）を自分自身の仕方で活用し解釈することは、諸能力が成熟に達した人間の特権であり正当な条件である。記録されている経験のどの部分が彼自身の境遇と性格に正しく適用されるかを見つけるのは、彼の仕事である。他の人々の伝統や習慣は、ある程度まで、彼らの経験が何を彼らに教えてきたかを示す証拠である。それは、推定証拠ではあるが、そのようなものとして、人の尊敬を要求する。

しかし、第一に、彼らの経験はせますぎるかもしれぬし、また彼らはそれを正しく解釈してこなかったかもしれない。第二に、経験についての彼らの解釈は正しいかもしれぬが、彼には適当でないかもしれない。習慣は通例の環境と通例の性格とのためにつくられるものであるが、彼の環境や彼の性格は通例のものでないかもしれないのである。第三に、その習慣が習慣としてよいものであり、また彼に適合するとしても、ただ単に習慣だからという理由でそれに同調することは、人間にのみ与えられた諸能力のどれをも彼の中に育成し発展させることにはならないのである。

- 自己の生活設計を、自分のかわりに、世間や自分自身が属している世間の一部が選ぶのにまかせる人は、猿のような模倣能力のほかにはどんな能力も必要としない。自分自身で生活設計を選ぶ人は、彼のすべての能力を使用する。彼は、見る観察力、予測する推理力と判断力、決定に必要な資料を集める活動力、決定する識別力を使わなければならない、いったん決定をくだしたら、自己の熟慮した決定を守る確固とした意思と自制心を使わなければならない。そして、彼はこれらの能力を、自己の行為のうち、みずからの判断と感情にもとづいて決定する部分の大きさに比例して必要とし、また行使するのである。

知覚、判断、識別感情、精神活動、倫理的好悪さえも含めた人間の諸能力は、選択という行為をする際にのみ訓練される。何事であれそうするのが習慣だからといってする人は、なんの選択もしない。彼は最善のものを見わけたり望んだりする練習ができない。肉体的能力と同じように精神的道徳的能力も、使われることによってのみ向上する。ただ、他の人々がするからするというのでは、これらの能力は少しも訓練されない。それはちょうどある事がらを、他の人々がそれを信じているという理由だけで信じるのと同様である。

人間の本性は、ひな形にならって組み立てられ、自己に定められた仕事だけを正確にするように作られている機械ではない。それは一本の樹木であり、それ自身を生命あるものとしている内面の力の趨勢（すうせい）にしたがって、あらゆる側面にわたってみずから成長し発展することをもとめているものなのである。

選択による能力の発展

- さらに、自分が多数派に属する資質をもっているとしても、幸福（よく生きる）ためには高級な能力が必要。
- 選択しないと能力が伸びない → 幸福になれない。

まとめ

- 「自由は勝手気ままなことをすることではない」という伝統は重要。「自由はなすべきことをなすことにある」という考え方には魅力がある
- しかし、「その人が理性的であれば／良心的であればなすべきこと」などを人々に強制することは非常に危険
- 自由な「生活の実験」は能力を伸ばし幸福を追求する上で重要